

Title	フランスの初代日本学者レオン・ド・ロニーの思想系譜と日本観：19世紀後半フランスにおける東洋観の変化を背景に
Author(s)	Belouad, Chris
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59149">https://hdl.handle.net/11094/59149</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【 4 】

氏 名	Chris <sup>クリス</sup> <sup>ベルアド</sup> BELOUAD
博士の専攻分野の名称	博 士（日本語・日本文化）
学 位 記 番 号	第 2 5 0 5 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学 位 論 文 名	フランスの初代日本学者レオン・ド・ロニーの思想系譜と日本観 — 19世紀後半フランスにおける東洋観の変化を背景に —
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 奥西 峻介 (副査) 教 授 嶋本 隆光 准教授 藤平シルヴィ 准教授 五之治昌比呂 准教授 佐野 方郁

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、フランスにおける初めての日本学者として知られる東洋学者レオン・ルイ・リュシヤン・プリュノル・ド・ロニー（Léon Louis Lucien Prunol de ROSNY, 1837-1914、以下「ロニー」と略す）を研究対象としている。彼の多面的な活動の中から、先行研究で見逃されてきた側面に焦点を当て、今までとは異なる「ロニー像」を描くことを目的としている。

まず、ロニーがフランスにおける日本語教育の創始者としてのみならず、シナ学者、民族誌学

者、アメリカ学者としても活躍していた点に注目したい。彼は日本学者として活躍し始める前には東洋学者の下で学び、様々な文化人とかかわっていた。19世紀後半フランスにおけるシナ学者スタニスラス・ジュリアン（Stanislas JULIEN, 1797-1873）の弟子としてシナ学を研究し、日本語教師となつてからも中国関連の研究を続けている。また、アメリカ・東洋民族誌学会の創立当初から、その組織のリーダーたる存在として活躍していた。その名はフランスの外務省でも知られ、日本人をはじめ、パリを訪問した漢字文化圏の使節の通訳・案内訳を依頼されることも多かった。その中では、1862年に竹之内使節団の一名としてパリを訪問した福沢諭吉（1835-1901）との交流が有名である。

この経歴からもうかがわれるように、ロニーは様々な分野とジャンルにわたって、多数の著書や論文を残している。そのため、彼の活動を包括的に研究することは極めて困難であり、ロニーの「全体像」は未だに描かれていない。先行研究では、彼の日本語教育者としての活躍と彼の福沢諭吉との交流という二つのテーマに焦点を当てたものが圧倒的に多い。また、ロニーの後のフランス人の日本学者や東洋学者達の中には、彼の活動が一定の方向性に欠けており、完成度の低い業績しか遺さなかったという批判的な見方もある。

以上の点に鑑み、本論文で取り組む課題は次の通りである。

第一に、日本学以外の著作や資料を扱い、ロニーの活動の多様な側面を描く。本研究もロニーの全体像を描くには至らないが、日本語教育者としてのロニーに偏った先行研究を補うことを目的としている。

第二に、ロニーの多面的な活動に何らかの過程と方向性があったのかを考える。そのために、彼の様々な活動を紹介しながら、それらがどのように繋がっているのかという問題を常に視野に入れる。

第三に、ロニーの活動を19世紀フランスにおける東洋観の形成・変化というより広い枠の中で眺め、ロニーの東洋観と日本観がどのようなものであったかを考える。その考察を通し、フランスの東洋学と日本学の歴史におけるロニーを現在より明確に位置付ける。

論文の構成はしたがって序論、本論五章、結びから成る。序論では、本論文の研究対象及び上述の三つの課題を提示する。第一章では、ロニーの生涯と活動、彼を対象とした先行研究、彼の活動の考察にあたり本論文で導入する概念を紹介する。第二章から第五章までは、先行研究で見逃されたか、あるいは言及されただけのロニーの様々な活動を取り上げる。そして、結びにおいて、本論文で描こうとしたもう一つの「ロニー像」について述べる。

論文の概要は以下の通りである。

第一章、第一部でロニーの活動と先行研究の紹介を行い、第二部ではロニーの活動を考察するにあたってフィルターとして導入する概念を紹介する。まず、「ルネサンス・オリエンタル」（フランス語のRenaissance orientale（東洋からのルネサンス）を片仮名に表記）というキーワードを取り上げる。「ルネサンス・オリエンタル」とは、18世紀末から19世紀前半にかけてのドイツ・ロマン主義から生じ、文学と学問を中心に19世紀フランス文化界のあらゆる分野に浸透していた理念である。その特徴の一つは、東洋の宗教文化を評価し、そこに西洋には欠けている何らかの可能性があると期待することである。続いて、「文献学的パラダイム」と「美学的パラダイム」という概念を提唱する。「ルネサンス・オリエンタル」が主に文献学から始まったことを踏まえ、その現象が発生し展開してきた時代を「文献学的パラダイム」の時代と定義する。その「文献学的パラダイム」は18世紀後半から19世紀前半の終りまで、およそ1世紀の間に存在していた。その後19世紀後半から、主に日本を対象に、工芸品中心の日本趣味、芸術作品中心のジャポニスムといった現象が相次いで生じてきた。本論文ではこの19世紀後半を、「文献学的パラダイム」に対し、「美学的パラダイム」の時代と定義する。

「ルネサンス・オリエンタル」は先行研究ですでに提示された概念である。それに対し「文献学的パラダイム」と「美学的パラダイム」の対立の構図は、東洋とジャポニスムの歴史についての先行研究の様々な解釈を参考にしたが、このような形で導入されるのは本論文が初めてである。

以降、第二章から第五章まで、ロニーの様々な活動を紹介しながら、彼が遺した資料から「ルネサンス・オリエンタル」の影響を受けた考えを引き出し、「文献学的パラダイム」と「美学的パラダイム」を背景に、彼が東洋学、日本学とジャポニスムの歴史の中では、どのような位置を占めているのかを考える。

第二章では、まず「ルネサンス・オリエンタル」を背景に、ロニーの東洋学者としての出発を描き、彼の思想系譜を辿る。ロニーは日本学に専念する前から、東洋学者の師や先輩との関わりから「東洋の宗教文化」と「東西文化の折衷の可能性」に関心を持っていたことを指摘し、その点をロニーの特徴として注目する。

続いて、民族誌学者としてのロニーに焦点を当て、彼がその立場から1850年代末に執筆した論文2点（「アメリカとオリエン」（1858年）と「オリエン」（1860年））を扱う。これらの論文の詳しい分析と引用を通じて、ロニーの考えには「ルネサンス・オリエンタル」の影響があることを証明する。その影響の主な要素は東洋を見る際に仏教をはじめその様々な宗教文化を重視すること、東洋に何らかの期待を寄せ西洋と東洋の宗教文化の「折衷」を望むことである。一方で彼は当時のフランスによる植民地開拓・拡張をも意識し、それを支持するような態度も取っている。こうした様々な要素の重なりがロニーの東洋観であると言え、さらにはその東洋観が彼の日本観をも形作ったのだという仮説を立てる。

第三章では、ロニーが1871年に執筆した戯曲『青竜寺』（*Le Couvent du Dragon vert*）を具体的に扱う。この『青竜寺』は日本を舞台・主題としたフランス初の戯曲であるにもかかわらず、今まで先行研究において詳しく検討されたことはなかった。

したがってまず、『青竜寺』の執筆の経緯について述べ、その作品の舞台設定、登場人物や物語構造を紹介する。続いて、プロットについて考察する。『青竜寺』のプロットは何らかの作品を参考にしたものではないかと推測したが、調査の結果、ロニーの師スタニスラス・ジュリアンが仏訳した中国の演劇『西廂記』のモチーフがプロットに取り入れられていることを発見した。この『青竜寺』と『西廂記』の関係は先行研究では指摘されていないものであり、本研究の発見である。

次に、ロニーが作中に日本を描くためにどのような要素を用いたのかを分析する。『青竜寺』における日本描写は、登場人物の台詞などを通し、宗教的要素を重視する傾向があることを指摘する。すなわち、第二章でも紹介したロニーの東洋への眼差しの特徴は、『青竜寺』というフィクションにおいても見られるのである。そして、『青竜寺』と同じ時代に発表された、日本を主題とした他の舞台芸術作品との比較を通して、『青竜寺』に見られる日本描写はロニー特有のものであることを確認する。

第四章では、ロニーと日本人宗教家である島地黙雷（1838-1911）との交流に焦点を当てる。ロニーは島地との対談の一部を文章にまとめ、それを「新しい宗教—宗教をどのように創るのか」という題で1875年にフランスの啓蒙雑誌に発表した。ここでは、その文章を紹介するが、島地との対話の中からロニーがとりわけ「仏教」と「日本の近代化」という二つのテーマに関心を持っていることに気づく。この島地との対談記録に加えて『紅葉集』（1901年）など他の資料も引用し、彼が日本の近代化をどのように見ていたのかを考える。ロニーが近代化を批判する資料もあるが、それは近代化のペースが速すぎるという批判のみである。その批判の裏には日本文化、とりわけ日本の宗教文化がなくなることへの恐れがあるが、その恐れ自体、日本文化に秘められた「折衷」の可能性への期待ではないかと推測できる。東洋宗教文化の重視と東西文化の「折衷」に対する期待感という二つの要素は、第二章で紹介したロニーの東洋観の特徴でもある。

第五章では、当時の新聞記事などを引用しながら、1880年代と90年代のロニーの活動に焦点を当てる。彼は当時日本語教育から次第に離れ、「宗教講座」を開設し、東洋の宗教と古代アメリカの宗教の比較研究に取り組んだ。その数年後、パリのソルボンヌ大学で一般人向けの公開講座を開き、そこで仏教を紹介しながら自分自身の思想を発表する。その後、仏教の「経行」をイメージした「哲学的散歩」も催すようになる。それらの活動には、前の章で指摘したロニーの「折衷」への期待が見られる。

続いて、「折衷仏教」という試みの経緯について述べる。ロニーは1892年に「折衷仏教学派」という組織を立ち上げ、1894年にその組織の金科玉条となるべき著作『折衷仏教』を発表する。本章ではこの『折衷仏教』を紹介し、ロニーが提唱していた「折衷仏教」とは主にインド仏教とキリスト教の共通点を指摘し、それらの要素を整理したものにロニー独自の考えを盛り込んだものであると分析する。

その分析に加えて『折衷仏教』の欠点も指摘し、実際「折衷仏教学派」という組織が早々に終わりを迎えたことを述べる。最後に、「折衷仏教」はルネサンス・オリエンタルの理念、ロニー個人の東洋の宗教文化への期待、そして東西の文化の「折衷」の可能性への期待、それらの要素の具体化を試みたものではないかと推測する。

結びでは、本論文において描いてきた「ロニー像」について述べ、日本学以外のロニーの活動の中から評価すべき点を指摘する。

まず、ロニーの日本学以外の様々な活動を見てみれば、それらの活動には一定の方向性があることが確認できた。その方向性とは、東洋の宗教文化に強い関心を持ち、それを中心として東西の文化の「折衷」に期待を寄せることである。その方向性の先には、「折衷仏教」という独自の試みがある。

そして、「文学的パラダイム」と「美学的パラダイム」という視点から、東洋学と日本学の歴史におけるロニーの位置づけについて考える。ロニーは、「美学的パラダイム」の時代に活躍していたにもかかわらず、一世代前の「文学的パラダイム」の理念によって東洋観と日本観を形作られており、「ルネサンス・オリエンタルの残光」の一つに終わってしまったと言える。だがそのような活躍は、日本学者としての彼の活躍の妨げになったものとして批判されるべきではなく、日本学の創立の役割に加えてロニーのもう一つの業績として見るべきなのである。

## 論文審査の結果の要旨

提出された論文「フランスの初代日本学者レオン・ド・ロニーの思想系譜と日本観—19世紀後半フランスにおける東洋観の変化を背景に—」は、レオン・ド・ロニー（以下ロニーと記す）という日本学者の思想的歴史背景を明らかにし、彼の日本学者以外の様々な側面にも光を当てながら、その日本観を分析しようとするものである。

第一章は、まずロニーの生涯とその活動を概観する。次にロニーに関する先行研究の状況を紹介し、その傾向と問題点を指摘する。続いて、本論文で考察の際に一貫して用いる二つの概念を説明する。ひとつは「ルネサンス・オリエンタル」、もうひとつは「文学的パラダイム／美学的パラダイム」である。前者は「東洋による西洋の再生」を意味し、19世紀のフランス文化界に広く浸透していた理念とされる。本論文はロニーがこの理念の影響を強く受けていたと推測し、そうした視点から彼の思想的傾向を分析する。また、ロニーが活躍した19世紀後半はジャポニスム隆盛の時期であり、ある先行研究はこの時期を「美学的パラダイム」の時代と名付けている。これに対し本論文は19世紀前半までを「文学的パラダイム」の時代と規定する。そして、ロニーは「美学的パラダイム」の時代に生きていながら、一貫して「文学的パラダイム」の思想的立場をとり続けたとする。

第二章は、ロニーが日本学者として活躍する前の研究活動に注目する。彼はインド、中国を研究する東洋学者として出発したが、同時に民族誌学者としても活動した。本章では、特にロニーが民族誌関係の学会誌に発表した論説文を取りあげ、そこから読み取ることのできる彼の思想的立場を分析する。結論としては、「ルネサンス・オリエンタル」の影響が顕著であり、それゆえ東洋の宗教文化を重視する傾向と、東西文化の折衷に対する期待というものが読み取れるとする。

第三章は、ロニーの手になる戯曲『青竜寺』(*Le Couvent du Dragon vert*)を取りあげる。これは日本をテーマとする戯曲としてはフランスで最も早い作品である。まずは『青竜寺』の文学的な面を分析し、これがフランスのメロドラマの枠組みを用いていること、中国の古典的戯曲『西廂記』の仏訳が粉本のひとつであることを指摘する。また、作品に見られるロニーの日本観を明らかにするために、様々な作者によって後に書かれた日本をテーマとする戯曲との比較を行う。結論としては、後の作品がどれも日本・日本人をエキゾティシズムの対象として描いているのに対し、ロニーは登場人物たちを「普通の」人々として描こうとしている。また、作品全体から宗教文化を重視するロニーの姿勢が読み取れるとする。

第四章は、ロニーが島地黙雷らとの会談を記録した記事を中心に、いくつかの資料を用いてロニーの日本観を考察する。岩倉使節団の一員としてフランスを訪れていた島地黙雷らはロニー宅を訪れ、ヨーロッパの宗教に関する情報を得ようとした。ロニーの記事は明らかに両者のすれ違いを伝えるものである。この記事を、日本の近代化について述べたロニーの他の著述と比較することで、次のような結論を引き出すことができる。ロニーは日本の近代化を高く評価していたが、それがあまりにも拙速であることに対しては批判的であった。それは主として、日本の宗教文化が失われることへの危惧によるものである。同時にロニーは、東西文化の折衷の可能性を日本文化の中に見いだしていたと考えられる。

第五章は、ロニーが晩年に行った思想・宗教活動を取りあげる。彼は「折衷仏教学派」という組織を立ち上げ、『折衷仏教』(*Le Bouddhisme éclectique*)という著作も刊行した。こうした活動は、ほとんど評価に値しないものであったが、少なくともそれは「東洋の宗教文化の重視」「東西文化の折衷への期待」という、かねてからの彼の思想を具現化しようとするものであったことは確かである。

「結び」においては、論文全体を振り返り、各章で論じたことを整理し直す。その上で、ロニーに対して次のような評価を下して論を結んでいる。すなわち、従来きわめて低い評価しか与えられてこなかったロニーではあるが、言語以外の幅広い文化的事柄まで研究対象としようとした点は、当時であっては実は特筆すべきことであり、彼は十分再評価に値する人物なのである。

本論文は、本邦初の本格的なロニー研究と言ってよい。先行研究において、ロニーは概説的に軽く扱われるか、特定のトピック（日本語教育、福沢諭吉との交流など）のみ論じられるかのいずれかであった。本論文は、日本学者のみならず、東洋学者、民族誌学者、戯曲の作者、思想・宗教活動家といった、これまで見過ごされてきた彼の様々な側面に注目している点で独創的である。あわせて、従来研究対象となることの少なかった、彼の多種多様な著作を取りあげて論じている点も評価できる。また、フランス東洋学に関する先行研究から「ルネサンス・オリエンタル」という概念を取り入れ、「美学的パラダイム」「文献学的パラダイム」という独自の枠組みを導入することで、様々な彼の著作、活動を貫く東洋観、日本観を考察しようとしていることも独創性のひとつである。歴史背景、特に思想史的背景への目配りが不十分な点もあるが、本論文はそうした欠点を補って余りある学術的価値を備えたものである。

なお、本論文の一部は学会における発表と学術雑誌に掲載された論文に基づいており、すでに一定の評価を得ているものである。

以上のような点をふまえて、論文審査委員会は、全員一致で本論文が博士の学位にふさわしいものであると判断した。